

I 地域生活支援のための福祉用具・住宅改修

住み慣れた我が家で暮らし続けるために

この冊子を手にとった方は、住まいを「何とか工夫できないか・・・」と考えていらっしゃる事と思います。

住まいについての考え方は人それぞれですが、あなたは何を価値基準として現在の住まいを選びましたか？

多くの場合「もしも、介護を要するようになったら・・・」という視点で選んでいません。デザインや実用性は重要な基準となりますが、それはあくまでも健康が前提となります。そもそも住まいにはたくさんのバリアー（障壁）がありますが、若く健康であればほとんどが問題にはなりません。しかしながら、加齢や病気がきっかけとなり、いままでは気にもならなかった段差等が突然大きな壁となり、ある日突然在宅生活の継続が危うくなる事があります。

そこで、介護保険制度や身体障害者福祉制度等においては、現在の住まいを自分の体に合わせて住みやすく改修等を行うものがあります。さしあたり介護保険制度においては、住宅改修、福祉用具購入、福祉用具貸与がありますが、利用の前提として介護支援専門員（ケアマネジャー）による課題分析（アセスメント）が必要となります。しかしながら、必ずしもケアマネジャーが、住まいや福祉用具の専門的な知識を有しているとは限りません。そこで理学療法士や作業療法士等のリハビリ担当者や福祉用具業者、建築関係者と相談しながら住まいの工夫をしているのが現状です。

住み慣れた家で生活していくための工夫とは、「不自由な体をどの様に動かすのか」だけではなく、生活を通じて身体機能の低下や転倒等の事故を予防し、生活機能が少しでも向上してくような視点を持つことがとても重要です。それには、専門職との連携が最も重要となるのですが、広い北海道内では様々な事情で、簡単に専門職に相談できない場合も多いのではないのでしょうか。

そこで、今回はリハビリや福祉用具の専門家を中心に、ケアマネジャー等の支援者に気づいてもらいたい所や目安となるポイントをわかり易く説明したハンドブックとして活用できるよう作成しました。ケアマネジャー等の皆様には、訪問等に携行していただき、一人でも多くの方が、住みなれた自宅で自立して暮らしていけるように、活用していただきたいと考えます。

最後に、本冊子はケアマネジャー等の皆様に、住宅改修等の専門家であることを望んだものではありません。あくまでも生活の専門家として、利用者と共に考え共に歩み、解決策を導き出し、より多くの方々が“住み慣れた我が家で暮らし続ける”事をご期待しております。